



神奈川大学箱根療養所にて公開シンポジウム

泉水 英計

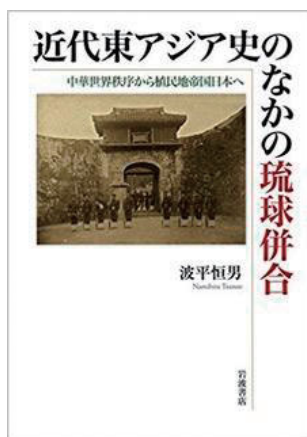
共同研究「植民地国家と近代性」では3月22日23日の両日、神奈川大学箱根療養所にて公開シンポジウムを開催した。対象地域を琉球・沖縄に設定し、招聘講師による研究発表を基軸に活発な討論がおこなわれた。

第一日目の発表「琉球併合と沖縄の近代」で波平恒男氏(琉球大学)は、「琉球処分」に関する従来の研究へ根本的な疑義を呈し、「琉球併合」という見立てによる書き直しを提唱した。第一の論点は、1879年沖縄県設置に至る政治交渉の研究が依拠してきた史料である。これは、内務官僚・松田道之が纏めたものであった。このような処分した側の記録に対し、処分された側の記録として波平氏が注目するのが、琉球国官僚であった喜舎場朝賢の『琉球見聞録』である。これと比較することで、波平氏は松田の史料にある歪曲を明らかにする。ただし、『琉球見聞録』は1914年に出版されていて稀覯本ではなかった。それにもかかわらず、「琉球処分」研究は、松田の史料にある歪曲を問題化できなかった。このことが第二の論点である。波平氏によれば、その原因は、戦前期には、沖縄人にとって日本社会への同化促進が課題であり、米国施政権下に置かれた戦後には日本復帰が沖縄人の宿願となったからである。すなわち、いずれの時期においても「民族統一」という理念が研究の枠組みを設定し、その限界のなかでの議論に

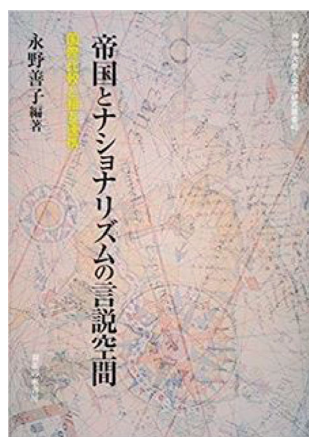
なってしまったからだという。第三の論点は東アジア史への展開である。日本政府の見解に根本的な疑義を呈するような視角をとってみれば、「琉球処分」とは、伝統的な華夷秩序の形式に準拠しておこなわれた近代的な帝国主義的侵略であった。すなわち、天皇は琉球国王を冊封した後、臣下の義務を怠ったという名目で琉球国が廃絶された。このような伝統的形式に準拠した近代的侵略は、朝鮮併合の際にも認められた。波平氏が「琉球処分」に替えて「琉球併合」という術語を提案する理由がここにある。以上の議論は、同氏がその著『近代東アジア史のなかの琉球併合』(2014)で展開したものであるが、当日の発表では、同書が沖縄社会でどのように受容されたか、また、同書の続編としてどのような研究を構想しているかについても言及があった。

波平氏の発表に対し、八尾祥平氏(神奈川大学)が指定討論に立った。八尾氏は、台湾独立運動を黙殺する国際社会や、合衆国ハワイ併合の合法性の主張を例に引き、波平氏の「琉球併合」論は、学術研究の領域を越え、台湾やハワイで問題になっているのと同様の歴史和解という現代社会の課題として理解されるべきであると論じた。

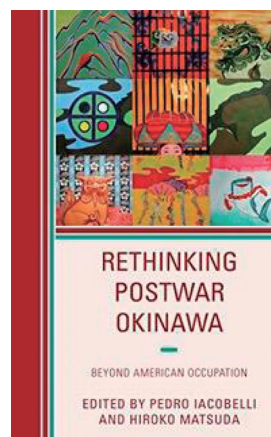
第二日目の発表「Invisible Armies: Base Work and Transnational Identities in Okinawa's Military Base」でジョハンナ・ズルエタ氏(創価大学)は、在沖米軍基地の調査にもとづいてフィリピン系労働者来歴と境遇について論じた。米国施政権時代に基地労働者として移動したフィリピン人には沖縄人女性と家族を持つ者も少なくなかった。しかし、このような第三国国籍者(TCN)には労働契約期間の終了後にはすみやかな帰国が求めら



近代東アジア史のなかの琉球併合



帝国とナショナリズムの言説空間



RETHINKING POSTWAR OKINAWA

れ、彼らは妻子を連れて帰国した。ズルエタ氏が着目するのは、フィリピンで成長したが、マルコスの独裁政権を嫌い、あるいは円経済圏の高収入を求め、沖縄に帰還した子供たちである。このような帰還者は、「在日米軍従業員(USFJE)」として日本政府機関に雇用され基地内で働いている。ズルエタ氏によれば、現在約2万6000人を数える在日米軍従業員のほとんどがフィリピンからの帰還者であるが、次のような理由で日本社会におけ



全氏による総括コメント

る「見えないマイノリティ」となっているという。第一に、フィリピンからの帰還者は、米兵と沖縄人女性のもとに生まれたアメラジアンのように外見上目立つことが少ないからである。第二に、母方戸籍に非嫡出子として登録されていることが多く、沖縄に帰還したときに容易に日本国籍を取得し、法律上は十全な日本国民になっているからである。しかし、日本語能力の欠如した帰還者には、フィリピンでの教育歴に相応しい職種へ就く機会はない。この点でニッケイジン(中南米移住者の子孫)労働者と似た境遇にあるが、英語常用者という点で異なっていた。日本の労働市場において、フィリピン系労働者が英語という文化資本を有効に活用できる数少ない選択肢が米軍基地従業員であった。結果として、沖縄とフィリピンを往復する人の移動から米軍基地労働者の再生産がみられることになった。以上のようなズルエタ氏の社会学的分析は、論集Rethinking Postwar Okinawaへの寄稿で触れているが、さらに彼女が執筆中の研究書の一部を構成するものであり、当日の発表では後者の他の章についても概略が紹介された。

この発表に対し、知花愛実氏(名桜大学)が指定討論に立った。知花氏は、基地内労働における差別的待遇と他者認識、とりわけ人種化された他者とがどのように交差するのかという問題を提議した。ズルエタ氏は応答で、フィリピンと日本の相対的経済力の変化や日本復帰による沖縄の法的地位

の変化により、フィリピン人、沖縄人、日本人、その間に生まれた子供に向けられる視線に複雑な歴史的変転があること示した。

これら二つの発表と指定討論のそれぞれに続いて、参加者から自らの研究地域／領域に照らした多くのコメントが寄せられ、発表の具体的な内容について、あるいは、鍵となる概念について発表者との間に活発な質疑応答がおこなわれた。

第一日目の夕方には、この共同研究の前身になる人文学研究所での共同研究の成果である『帝国とナショナリズムの言説空間』の書評会がおこなわれた。福浦一男氏(桐蔭横浜大学)と松岡昌和氏(秀明大学)が、今回のシンポジウムに参加している寄稿者の論考について一つ一つ丁寧に批評し、他の参加者もコメントを寄せた。打解けた後の質疑応答は熱を帯び、予定時間を大幅に超過して消灯時間まで続いた。

第2日目の終わりには全京秀(ソウル大学名誉教授)氏による全体の総括があった。全氏は、自身の在沖米軍基地調査の体験談を交えつつ、両日にわたる議論を振り返った。そこでは、ほぼすべての参加者が共有する近現代史への強い関心を評価しつつも、沖縄を論じるときには、より長大な時間を通じて東南アジアと東アジアを結んできたものにも目を向けるべきであるという提言がおこなわれた。

(所員 経営学部 教授)